

木曾川上下流が連携して水源林の保全をと、長野県南木曾町の林業に関心のある人らでつくる町林業研究クラブが、中京圏の住民に呼び掛け、林業体験を通して都市と山村の交流を続けている。会長の柴原薫さん(44)は「おいしい水を飲んだ時に、川上の人の山の手入れの苦労を少しでも分かってもらえたら」と話す。(宮川 弘)

長野・南木曾町林業研究クラブ会長
柴原 薫さん(44)



かなア、やっど、山らしくな
ってきましたね」。

交流事業を始めて十二年。
「今では、木曾で開かれる講
習会に、わざわざ名古屋から
受講しにやって来るんです
よ。小さな種が飛んできて、
少しずつ育っていくように、
うれしいなあ」と山造りの大
切さが理解されてきたことを
喜ぶ。

んと手入れできるよつになり
たい」と、山造りについて学
ぼうと仲間とクラブの活動を
始めた。

クラブは、一九九五年の阪
神大震災の被災地に住宅資材
を運ぶ支援運動にもかかわっ
た。神戸市長田区では、古い
木造住宅が地震による火災で
焼けてしまった。「がんばれ
ら八割が海外からの輸入が占
める日本。「目の前にある木
を切って使えばいいのに、わ
ざわざわインドネシアから持
てくる」と現状を嘆く。

体験実習では、セラミック
の原石を採取して砂漠化した
山を、元の緑の山に戻すこと
に取り組んでいる。樹木医の
指導で広葉樹を植え、その落
ち葉で腐葉土を作り、さらに
針葉樹も植えて「混交林」に
する。「クスナラなどとも
にヒノキやマツを植えます。
また、酸性雨に強い山になる
ように、間伐材のクス材を燃
やして炭にして山にまきま
す。植林したのは三秒ぐらい
の命の源にもなっている。

「森と川と海はつながって
いるんです。それを、普段の暮
らしの中で気
付けてほし
い」と訴え
る。

森と川と海は一体

「水源の里体験実習」(中
日新聞社後援)と名付けられ
た交流事業は、一九九二年か
ら始まった。年に一、二回、
名古屋市周辺の住民と地元の
人たちが、町内
の町有林や国有
林で枝打ちや間
伐などをした
り、間伐で切り
出した木を使って炭も焼いて
いる。「名古屋から車で高速
道路を飛ばして来るんです
よ。一日作業をして汗をか
き、満足して帰っていきま
す」と話す。

実家は二百秒の山持ち。家
業は、父の代から始めた製材
業。東京の大学を卒業後、家
に戻って仕事を手伝っている。
「自分の山ぐらいいはちゃ
林は、下刈り、間伐、枝打ち
指導で広葉樹を植え、その落

南木曾町林業研究クラブ

林業に関心が
あったり、これから林業を始める町
内の若者6人が1977(昭和52)年
に設立。育林技術を互いに磨くうち
に活動を強化。「山づくりは人づくり」と考
え、上下流の交流事業「水源の里体験実習」
や、小中学生を対象にしたシイタケ植菌、枝
打ち体験などもしている。現在、会員は約20
人。木材関連業の他、町役場職員も多い。



水源の里体験実習で育林体験をする都会
の人たち=昨年11月、長野県南木曾町で